

脊髄病理学

著：橋詰良夫，吉田眞理

亀山 隆

中部ろうさい病院神経内科

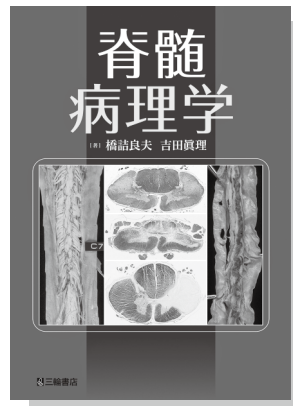
ついに待望の『脊髄病理学』が発刊された。本書は本誌「脊椎脊髄ジャーナル」に約8年間の長期にわたって連載されたカラーアトラス「脊髄病理」をまとめたものが基礎となっている。ありとあらゆる脊髄疾患の病理標本がきれいなカラー写真で提示されており、よくこれだけの数の病理標本を集められたものとあらためて感心させられる。脊髄の病理に特化した本としては、古く英国 Oxford の J. Trevor Hughes 著 *Pathology of the Spinal Cord* (1966 年に第1版，1978 年に第2版) が発刊されているが、同書には限られた疾患の病理標本しか掲載されていない。その点で橋詰良夫先生とその後継者である吉田眞理先生による本書は、脊髄疾患がほぼ網羅されており(各論では84の疾患・項目を記載)、世界に類をみない大作となっている。

評者はかつて橋詰先生のもとで脊髄病理の勉強をさせていただいたが、先生の脊髄病理研究への並々ならぬ情熱と執念(「脊髄愛」といってもよい)を感じていた。病理解剖例は神経疾患に限らず全例脊髄を採取し、しかも脊髄全

節の標本を作製していた。これまでの約40年間で切り出した脊髄は2,000本を超えるそうで、その数は間違いなく世界一であろう。硬い脊椎の中に埋もれている脊髄の採取は、大変骨の折れる仕事であるが、先生は頸髄から馬尾まで硬膜と後根神経節をつけた状態であつという間にきれいに^{わだ}取り出していた。そのみごとな技は重要無形文化財(人間国宝)といってよい。本書は、そのような長年の脊髄病理研究の情熱と苦勞の集大成である。

著者の2人は、もともと神経内科の臨床医(現在も臨床にも従事)であり、臨床に関する記載も簡にして要を得ており、所々に画像所見を交えて病理所見との対比がなされ、臨床と病理の関連を重視する立場が貫かれている。大部分の疾患できれいな脊髄の横断面標本(いわゆるルーペ像)が提示されており、病変の広がりや萎縮などの形態変化が一目で理解でき、臨床医にとって画像所見や症候を理解するうえで大変有用である。

著者らの神経病理研究は「発生から老化まで」を基本コンセプトとしており、最初の総論の項にあ



る「脊髄の加齢性変化」は、新たな知見を与えてくれる。さらに、脳病変が主体の疾患(プリオン病、Parkinson 病、Alzheimer 病など)の脊髄病変についても詳述されており、神経系の中で進化のうえで古くて単純構造である脊髄に生ずる病変への注目は、原因不明の神経疾患の病態解明研究にも資するのではないと思われる。

日常診療においてわれわれ臨床医は、疾患のより根本的な病理・病態について、あまり深く考えをめぐらすことなく、診断・治療を行っている。本書は脊髄疾患の「病(やまい)の理(ことわり)」を視覚的にわかりやすく理解させてくれ、疾患を診る眼を進化させてくれるものと確信する。脊髄病理の事典として一家(一科)に一冊常備しておきたい。

●定価(本体 20,000 円+税)
A4 判，336 頁，三輪書店